

令和元年度サクラマス幼魚（スモルト）放流式



関係者による放流の様子

5月23日（木）、老部川内水面漁業協同組合（西山忠一組合長）のサクラマスふ化場で、村内各漁協をはじめ、県・村関係者等60名出席のもと、サクラマス幼魚（スモルト）放流式が行われました。

この放流事業は、主に沿岸海域でのサクラマスの水揚げ増大を図ろうと、昭和60年のサクラマスふ化場完成とともに毎年実施しているものです。



放流されたサクラマス幼魚

今回のサクラマス幼魚（スモルト）放流式では、平成29年8月中旬から10月上旬にかけて老部川に遡上した親魚から採卵した幼魚と、3年間飼育した池産系親魚から採卵した幼魚で、ふ化してからおよそ1年6ヶ月間飼育した平均尾叉長14.2センチ、平均体重31.0グラム程度の幼魚1万尾が関係者の手により放流されました。

なお、今年はいずれも全年度で幼魚約5万2千尾、稚魚約21万9千尾の計約27万1千尾を、村内の河川に放流する予定となっております。

今後も継続的にサクラマス幼魚や稚魚放流を実施することで、沿岸海域での水揚げと河川回帰の増大に、大いに期待がもてるものと思われ

東通村漁業連合研究会「スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」を開催



講師 水産総合研究所 今村豊氏

5月23日（木）、村体育館において、村漁業連合研究会（二本柳亮会長）主催による「令和元年度スルメイカ漁況の見通しに係る研修会」が行われました。

30名が参加した今回の研修会では、講師の地方独立行政法人青森県産業技術センター水産総合研究所漁場環境部研究管理員今村豊氏から近年の漁獲・資源動向や水温分布に基づく漁況の見通しについて講演がなされました。



講演を熱心に聞く参加者

今村研究管理員によると、本県周辺における漁況の見通しは、「日本海側で主に漁獲される秋季発生系群、太平洋側で主に漁獲される冬季発生系群の資源は共に少ない状況であり、各海域共に近年並みの漁獲量で推移すると予測した。また、資源が少ないということからは親が少ない状況のため、数年良い状況が続かないと漁獲の回復が期待できないもの、産卵場の環境は良く なっているとの研究成果が報告されており、資源の回復の見込みはある。」とのことでした。

参加者は近年のスルメイカ漁の不漁もあつて、今年のスルメイカ漁の見通しについて真剣に耳を傾けていました。依然として不漁が予想されるスルメイカ漁ですが、好漁場が村の沿岸に形成され、見通しを上回る漁になることを願っています。

こども園ひがしどおり5歳児 あわび種苗センター・サクラマス孵化場見学

5月29日（水）、あわび種苗センター及び老部川サクラマス孵化場において、こども園ひがしどおり5歳児による施設見学、サクラマス幼魚放流体験が行われました。

この体験学習は、あわび種苗センターや老部川内水面漁協の協力のもとで、自分たちの住んでいる東通村で行っている事業を学ぶことを目的に実施されたものです。

あわび種苗センターでは、担当職員からあわびの生態に関して説明を受けた後、村内で捕れる海の幸に触れて学び、老部川内水面漁協では相内参事からサクラマスの生態に関する説明を受けた後、幼魚放流が行われました。

両施設での幼児達は、「あわびは何を食べて大きくなるの？」「サクラマスは海へ行って川に戻る頃はどのくらい大きくなるの？」と説明してくれる職員にたくさん質問を投げかけていました。



サクラマス幼魚を放流する5歳児



海の幸に触れる5歳児